ラナック、クルーエ

十七・八世紀の美術、美術の衰頽

彫刻、劇場時代、ベルニニー、アルガルデー、プジェー、ジラルダン、シリゥタル、十九世紀彫刻の進歩

絵画、フランダル、社会変化と絵画の変化、肖像画・風俗画・歴史画・山水画・浮世絵（ジャンヌル）・花鳥動物画・スチルライフの分立、写生の支配、カラッチー、ギドー・レニー、スルバラン、アラソ・カノー、ブエラクエ（ヴェラスケス）、ムルリヨー（ムリリョー）、ルーベンス、バンダイク、レムブラント、ジョルダーンス、デサー、メングス、プーサン、ミニヤルド、レーノルド、マイエリス、ブルーゲル、テニヤルス、クーサン、クロード・ゲレー、サルベートル・ロザー、ライスデイル、ホビマ、ジャン・ビース、ポール・ポッター、ウーベルマン、カイプ、マイダルス、ジョーン・フェット、ド・ヒーム、ハイサム

十九世紀の美術、社会変動、前半期（復古時代）と後半期（写生主義）の区分、世間全体の考えに訴える絵画、絵画と建築の結合、彫刻興隆、北方中心の美術

前半期、建築に於ける復古、彫刻興隆（カノーバ、トルワルスデン（トルヴァルセン）、シャドウ）、ダビッド、バリー

今日の美術（彫刻）、アカデミーのファルゲール、メルシエ（メソニエ）、ゴーデース（ゴーデンス）、早取派ルーダン（ロダン）の作風

（前記簡略講義筆記のノートには絵画に関する箇所もあり、ミレー、コロー、「インプレッショネッス派」について短い言及がなされている。）

福地復一の東洋美術史講義

福地復一（317頁参照）の東洋美術史講義は秋山要治（明治三十二年彫刻科卒）の筆記ノート「東洋美術史　巻壱　福地先生口授筆記」によって内容の一端を知ることができる。筆記の時期は明治二十七年から二十九年の間であると推測される。内容項目は左記のとおりである。

日本の国土、国の開化の条件（地勢風土）、日本の地勢風土と美術との関係

日本人の性質および風俗、日本人の起原に関する諸説、日本美術の発生と特性

推古以前の美術、作例解説（図示）

日本美術史の時代区分

古文献に登場する美術関連事項（神武～崇峻）

神功皇后征韓以後の朝鮮の影響、朝鮮の歴史（人種と国の変遷、日本との関係、朝鮮各地）

支那の歴史（人種の起原と種類、三皇五帝より六朝までの各時代の文化）

印度の歴史（地勢、風俗、人種と性質、衣服、仏教の現状、仏教の道理、開国より釈迦の登場までの歴史）

なお、時代区分は岡倉の区分法（469頁参照）との対照の意味でノート原文を左に掲げる。

古代
- (一)推古時代　聖徳太子　朝鮮
- (二)天智天皇　隋　唐初
- (三)天平時代　唐

中古
- (四)弘仁時代　空海
- (五)藤原時代（前期　后期）
- (六)平氏時代

純日本

近代
- (七)鎌倉時代（前期）宋（後期）元
- (八)足利時代　宋　元　明初
- (九)豊臣時代
- (十)徳川時代（前期　中期　後期）

森鷗外、後藤貞行の「美術解剖」講義

「美術解剖」の科目は最初の「東京美術学校規則」に専修科の絵画科、彫刻科第一年の履習科目（毎週二時）として登場する。フェノロサや岡倉はこの科目を重く見て、カリキュラム原案作成の段階からこれを置くことを予定していた。岡倉の『国華』発刊の辞に明らかなように、岡倉らは日本の絵画、彫刻は日進月歩著しい明治の智識を応用して精神の開発を図るべきであり、特に、人物を題材とする際などは解剖学、遠近法等の学問的知識を応用すべきであって、そのことは日本固有の精神の維持に抵触しないと考えていたのであった。

明治二十五年の規則改正以後は彫金科、鋳金科、蒔絵科の一年生にもこの科目の履習が義務づけられ（蒔絵科は同二十七年以後履習廃止）、次いで同二十九年七月、西洋画科設置等に伴う規則改正の際には西洋画科と彫刻科は第一、二年で、日本画科は第三年で、彫金科、鍛金科、鋳金科は第一年でこれを履習することに改められた（毎週一時）。西洋画科と日本画科とでは「美術解剖」の位置づけが異なっていた点が注目される。

この科目の担当者についていうと、最初は後藤貞行であったと考えられる。馬の彫刻家として知られる貞行は、本校が楠公銅像製作を請負った際に高村光雲を介して採用され、楠公像の馬の木型制作を担当したが、「美術解剖」も担当したらしい。『雨山先生遺作集』には白井雨山ら第一期生の時代は「美術解剖」といっても人体解剖ではなく、貞行の馬体解剖講義のみであったとある。この初期の貞行の講義に関する資料は現存しないが、のちの時期の講義筆記（後述）が残っているので、凡その内容は把握できる。

貞行の後任が森鷗外であり、馬体解剖に代わって人体解剖の講義が始まった。陸軍軍医学校教官、陸軍二等軍医生、従六位森鷗外は、本務の傍ら明治二十四年二月十四日から同二十八年七月まで本校嘱託教師としてこの講義を担当している。岡倉覚三の日記「雪泥痕」（明治二十三年）によれば、それ以前から鷗外と岡倉は交際があったようであり、そのことがきっかけとなって起用されたものと思われる。左記の書簡は起用に際して岡倉が鷗外に出したものである。

拝啓　人骨モ大学より参り候ニ付御差支無之候ハヽ御都合次第左の日割にて御開講相成候様致度　尤モ専修科甲乙生の分は是